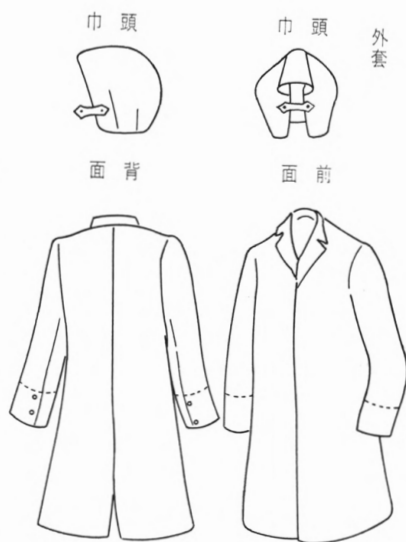


外套



〔自明治四十四年一月教務内規、諸規定書類 教務掛〕
至

⑧ 校友会文学部再興

明治四十年三月、校友会文学部が再興され、大村西崖が部長となった。文学部が新設されたと報じている新聞もあるが、新設されたのは明治三十五年六月、新校長正木直彦を会長に迎えて校友会が体制を改めたときで、このとき

本部ハ文學美術ニ關スル識見ヲ高尚ニスルヲ目的トシ詩歌文章等ヲ研究シ又ハ朝野ノ名士ヲ延キテ諸般ノ講話ヲ請フモノトス

という規則の制定もあった。しかし、概して活動が不活発であったので、有志がこれを再興したのである。この文学部の活動は明治末

の美術界、文学界の情況との対応において興味深いものがあるので、ここに概況を記すが、その前にまず文学部再興以前における生徒の文学活動について触れておきたい。

校友会は本校生徒、教員、卒業生によって構成されていたが、明治三十五年六月の改革以前においてはその活動に展覧会（会員の新作展）、講話会（名士の講演）、運動会（遠足）があった。会員の中には少なからず文学趣味を有する者があり、例えば屋代鉞三（晁江）、水谷鉄也（佳園）、白井保次郎（雨山）その他は短歌の会を作り、小杉楢邨を選者に仰いで毎月歌会を開き、佳作を『校友会雑誌』に寄稿した。当時は香取秀真、原安民、平子鐸嶺、高村光太郎のような詩歌に長けた会員もいた。秀真、安民、鐸嶺の三人は正岡子規門下、根岸短歌会（明治三十年結成）の会員で、同会の機関誌『馬酔木』発行（同三十六年）の際に秀真と鐸嶺は編集員となっている。とりわけ秀真は短歌に造詣が深く、本校在学中から研究サークルを作って『闊芳』（同二十六年）、『うた』（同二十九年）などを発行する一方、校内の花月会（黒川真頼を選者として同二十六年結成）にも加わり、卒業後は佐々木信綱編『やまと錦』や『心の花』（同三十二年発行）に寄稿するとともに根岸短歌会に加わった。『校友会雑誌』にもよく寄稿している。安民も晩年に大磯鳴立庵主となったことからわかるとおりの歌よみであった。鐸嶺は『校友会雑誌』の編集を一手に引き受け、自らもこれに研究論文を発表しているが、筆名で短歌も載せていることも考えられる。高村光太郎は彼らよりやや後輩で、在学中の明治三十三年に与謝野鉄幹の新詩社に入り、簞碎雨の筆名で

『明星』に短歌を寄稿し始めた。彼はその前の年から校友会委員になつてゐるので、『校友会雑誌』にも或いは寄稿したかも知れない。

校友会が改革され、その新しい機関誌として登場したのが『東京美術学校校友会月報』である。明治三十五年の創刊より同三十九年までの同誌の文芸欄を通観すると、漢詩や漢文(屋代晃江・平子鐸嶺・風来山人・水谷皆松など)、短歌(屋代晃江、水谷佳園、辻村松華、石島文太郎(古城)、水島爾保布、坪田虎太郎(簞堂)、中溝四郎(柴彦)、俊海禪師、増井静可(志津可)、碧龍、鈴木雪哉、竹廼舎、大谷浩(碧雲居)その他)、俳句(川端玉章)および散文が盛んに掲載されている。月報編集主任の屋代晃江が率先して寄稿していることや、当時『新文芸』で活躍中の水島爾保布などがよく寄稿していることが注目される。香取秀真も『校友会雑誌』時代から引き続き寄稿しているが、特に彼が蟪蛄山人の筆名でたびたび寄稿した評論に対して海士(大村西崖)^(けいこひぐらしぜみ)その他の反論が掲載されるなどしたため、月報第一巻(三十五年六月〜三十六年七月)の紙面には大いに活気が生じた。

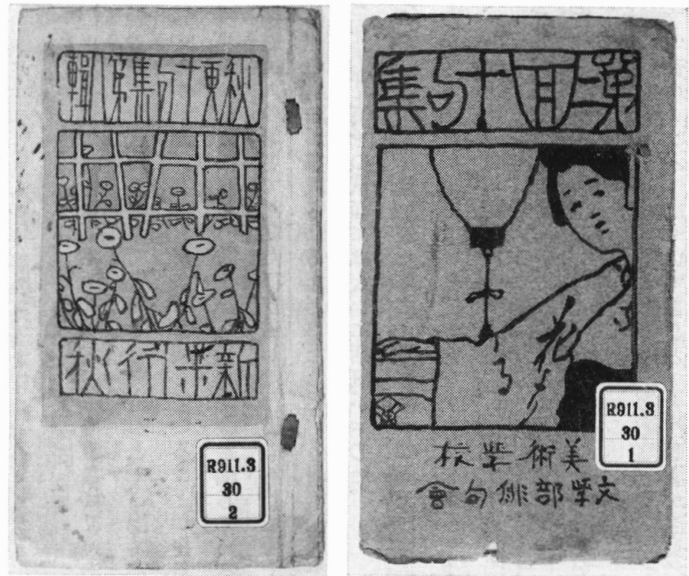
このように文学愛好家たちによる月報への盛んな寄稿が続けられるなかで、空文に化している文学部を活性化しようとする動きが生じ、それは月報の「我が友の声」欄(第三巻第一号より開設)などを通じて次第に表面化した。そこで三十九年夏ごろに至り、西洋画科一年生の中溝四郎が中心となつて計画を練り、その結果文学部が再興されたのである。

文学部のメンバーについて言うと、大村西崖が部長に就任したの

は確かだが、部員については正確な記録が無く、はっきりしない。ただし、前出の中溝四郎は当然加わつていたであろうし、後述の月報文芸欄や雑録欄への寄稿者の多くは文学部員であつたと考えられる。また、月報編集員の生徒たちは文章が達者であつたから、文学部に加わつていたのではなからうか。因みに編集員となつた生徒は、明治三十年代後半においては永倉茂(江村)、高山(吉田)六郎、谷鐸太郎、石島古城、西村喜三郎(青舂)、岡本尚市らであり、四十年代においては中溝四郎、大谷浩、岡本一平、大野隆徳、川路誠(柳虹)、伊藤順三、神津港人、今和次郎、大久保作次郎、小糸(絲)源太郎、田辺孝次等々の面々であつた。

次に活動の概況であるが、その活動項目は講演会開催、詩歌散文の創作、新刊文学雑誌の購読(部室に備え付けること)等であつた。最初に活動を開始したのは俳句愛好家たちで、彼らは文学部再興と同時に俳句の会を作り、渡辺水巴(花鳥画家渡辺省亭の息子で『ホトトギス』派の俳人)を師匠に毎月運座を開いてその佳作を月報文芸欄に載せ始めた。それらの多くには俳号が用いられていて実名がはつきりしないが、大谷浩、近藤浩(自然)、岡本一平、山内金三郎(神斧)、町田英(露雨。のちの嘉章、佳声)、矢沢貞則(弦月)、建昌弥一郎(大夢)らの名が確認できる。

短歌の会は俳句の会よりやや遅れて発足したが、ここでは屋代晃江、平田栄二(松堂)、大野隆徳、津田信夫、今戸精司、坪田虎太郎、山本豊(ゆたか)、広川松五郎(菽泉)、土橋三郎(華城)、原三郎(すきま)、志摩鶴二、高村豊周(なにはばら)その他多数が活躍し、俳



校友会文学部俳句会回覧誌

句の会を凌ぐ勢いをみせた。彼らの作も月報に盛んに掲載されているが、特に与謝野鉄幹門下の広川松五郎、高村豊周（光太郎の弟）の活躍が顕著である。明治四十五年には彼らを中心とする鴨跖草会（つぎくさかい）が文学部のなかに生まれ、これが大正二年に黒耀社（688頁参照）へと発展する。

このように詩歌の創作が活発化するにつれて月報の文芸欄は文学や美術、演劇の評論や紀行文、散文、自由詩などの投稿で賑うよう

になり、また、恐らく文学部員によって、文学界や美術界の新思潮の紹介も「論談紹介」の欄で行われるようになった。

文学部主催の講演会には文学者その他当代の有名人が招かれて文芸や美術について論じたので全校生の関心が集まった。後出の曾宮一念氏の回想記からも窺われるように、印象深い催しであったらしい。生徒によっては授業の「美学」や、教師たちが折にふれて断片的に語る美術論からは得られない新鮮な刺激を受けたことだろう。

第一回の講演会は再興文学部発会式の当日、すなわち四十年四月二十日の土曜日に、夏目漱石と上田敏を招いて開かれた。このことは翌日の『東京朝日新聞』に、

○美術學校の文學部 同校學生團にては新に文學部を設け教授大村西崖氏を部長に推し毎月一回文學上の研究を爲す事とし昨日其の發會式を舉げ正木校長、夏目漱石、上田敏諸氏の講演ありたり

と記されており、『日本現代文学全集』23（講談社）所収夏目漱石年譜にも記載がある。講演会ではまず校友会会長正木直彦が演説し、次いで漱石が「文芸の哲學的基礎」と題する講演を行い、その後上田敏の講演があった。上田敏の本校における講演は明治三十四年に次いでこれが二度目であった。その演題、内容については記録が無く、ただ、「御得意のウォーター、ペーター [walter pater]」を話された。」という記事が月報第五卷第七号にあるのを知のみである。

漱石の講演について言うと、彼は正木を通じて入手した校友会作成の速記を大幅に布衍するなどして手を加え、それを翌月から同題で『東京朝日新聞』（五月四日～六月四日）に連載（月報第五卷第十号に転載）したので、これによって凡その講演内容を知ることができると。その序の部分で漱石は、講演というものはほとんどやったことがなかったが、大村西崖がただ顔を見せるだけでもいいからと熱心に頼むので大決心をして承諾したと言っており、これによって西崖自らが交渉に出向いたことがわかる。

この「文芸の哲学的基礎」は『漱石全集』第九卷（大正九年。漱石全集刊行会）をはじめ、漱石関係文献に収録され、内容についても種々論じられているので、ここであらためて云々する必要はないだろう。要するにこの論説は「人間の理想を大別すれば、眞・善・美・壯などとなるが、眞を標榜する自然主義は、人間の理想の四分の一を表現するに過ぎない。それはそれでいいとしても、それだけが人生を描寫したものであるかの如くに考へ、眞を標榜する爲に、他の善・美・壯などといふ理想を冒さうとするに至つては許し難いといふやうな、當時の文壇の自然主義批判を主意とする」（小宮豊隆著『夏目漱石』二。昭和四十二年第九刷。岩波書店）もので、明治三十八年『吾輩は猫である』によって文壇にデビューした漱石が、同四十年四月、官立学校教師の職を捨てて朝日新聞社に入り、愈々本格的に創作と取り組もうとしたとき、その「立脚地と抱負を明かに」（「文芸の哲学的基礎」序文）するために発表したものであったのだが、美術学生相手の講演だっただけに美術の問題を顧慮して論じており、注目すべき発言も見られる。その一つは裸体画の問題である。漱石

は文芸家の理想には美に対する理想、真に対する理想、愛や道義（善）に対する理想、莊嚴に対する理想と、これら四種の理想のさらに分化した理想があり、いずれも同等に尊重されるべき権利を有するとした上で、裸体画について、

現今西洋でも日本でも八釜しく騒いでゐる裸體畫^{〔など〕}杯と云ものは全く此の局部の理想「美的理想」を生涯の目的として苦心してゐるのであります。技術としては六つかしいかも知れぬが文藝家の理想としては、ほんの一部分に過ぎないのであります。人によると裸體畫さへかけば、畫の能事は盡きた様に吹聴してゐる。私は畫の方は心得がないから、何とも申しかねるが、あれは佛國の現人の風潮が東漸した結果ではないでせうか。とにかく、畫でも詩でも文でも構はない。感覺物として見たる人間が既に感覺物の一部份に過ぎん上に、美的情操と云ふのが又、此の感覺物として見たる人間に對する情操の一部に過ぎんと判然した以上は、裸體美と云ふものは尊いものかは知れぬが、狭いものには相違ないでせう。」

と言ひ、また、一般社会の風紀から云うと裸体は見苦しい不体裁なものであるにも拘らず人体の感覺美をあらわすには裸体を描かなければならないとして裸体画が描かれ感賞されるのは「不體裁の感を抽出して、裸體畫は見るべきものである」という一種の約束が成立しているからにすぎないのであって、「あまり威張れば存在の權利を取上げてよい位のもの」であると言つて裸体画礼賛を批判してい

る。次は技術練磨の問題であり、次のように述べて技巧偏重の弊について注意を喚起しようとしている。

文學者の一部分で、しきりに「人生に」觸れる／＼と云ひ、技巧は無用た／＼と云つて居るに反して、畫家の方では——畫家は我々の様に騒々しくくない、大人しく勉強して居られるから、無暗に三つ半は敲かれぬ様であるが——然し其實行して居られる所を拜見すると、觸れるの觸れぬのと云ふ事を頓着なく只熱心に技術を研いて居られる様に見受けます。申す迄もなく私は極めて畫道には暗い人間であります。だから畫の事に關して嘴を容れる權利は無論ないのですが、門外漢の云ふ事も時には御參考になるだらうし、かうして諸君に御目にかゝる機會も滅多にありません。且つ文藝全體に通しての議論ですから、大膽な所を述べて仕舞ひます。——あなたの方では人間を御かきになるときはモデルを御使ひになります、草や木を御かきになるときは野外もしくは室内で寫生をなさいます。是はまことに結構な事で、我々文學者が四疊半のなかで、夢の様な不都合な人物、景色、事件を想像して好加減な事を並べて平氣で居る是よりも遙に熱心な御研究であります。其の効能は固より御承知の事で、私杯が彼れ申すのも釋迦に何とか云ふ類になります。先講話の順序として分らぬ乍ら、分つたと思ふ事を述べます。かう云ふ修業で得る點は私の考へでは先づ二通りになるだらうと思ひます。一つは物の大小形狀及び其の色合杯について知覺が明瞭になりますのと、此の明瞭になつたものを、精細に寫し出す事が巧者に且つ迅速に出来る事だと

信じます。二は之を描き出すに當つて使用する線及び點が、描き出される物の形狀や色合とは比較的獨立して、それ自身に於て、一種の手際を帯びて來る事であります。此の第二の技術は技術であり且つ理想をもあらはして居るからして純然たる技巧と見る譯には参りません。現に日本在來の繪畫は重に此の技巧丈で價値を保つたものであります。それにも關はず、之に對して鑑賞の眼を恣にする、それ／＼に一種の理想をあらはして居る、即ち畫家の人格を示して居る、爲めに大なる感興を引く事が多いのであります。たとへば一線の引き方でも、（其の一線丈では畫は成立せぬにも關はず）勢ひがあつて畫家の意志に對する理想を示す事も出來ますし、曲り具合が美に對する理想をあらわす事も出來ますし、又は明瞭で太い細いの關係が明かで知的な意味も含んで居りませうし、或は婉約の情、溫厚な感を蓄へる事もありませう。（知、情の理想が比較的顯著でないのは性質上已^レを得ません）かうなると線と點丈が理想を含む様になります。丁度金石文字や法帖と同じ事で、書を見ると人格がわかる杯と云ふ議論は全く是から出るのであらうと考へられます。だから、この技巧はある程度の修養につれて、理想を含蓄して参ります。然し前種の技巧、即ち物に對する明瞭なる知覺を其の儘にあらはす手際は、全然理想と沒交渉と云ふ譯には参りませんが、比較的之とは獨立したものであります。之をわかり易く申しますと、物をかいて、現物の様に出來上つても、知・情・意、の働きのあらはれて居るんがあります。何だか氣乗りのしないのがあります。どこなぐ器械的なのがあります。私の技巧と云ふのは、此の種の技巧を

云ふのであります。私の非難したいのは、此の種の技巧丈で畫工にならうと云ふ希望を抱く人々であります。無論諸君は、畫工になるには此の種の技巧丈で充分だと御考へになつては居られますまい。然し技巧を重にして研究を重ねて行かれるうちには、時によると知らぬ間に、つい此の弊に陷る事がないとは限らんと思ひます。再び前段に立ち歸つて根本的に申しますと、前に述べた通り、文藝は感覺的な或物を通じて、ある理想をあらはすものであります。だからして其の第一義を云へばある理想が感覺的にあらはれて來なければ、存在の意義が薄くなる譯であります。此の理想を感覺的にする方便として始めて技巧の價值が出てくるものと存じます。此の理想のない技巧家を稱して、所謂市氣匠氣のある藝術家と云ふのだらうと考へます、市氣匠氣のある繪畫が何故下品かと云ふと、其の畫面に何等の理想があらはれて居らんからである。或はあらはれて居ても淺薄で、狭小で、卑俗で、毫も人生に觸れて居らんからであります。

なお、漱石は真、善、美、壯の分化ないし變形としてのより新しい(または深い、広い)理想を求めよと説いており、それは特に個性を保持し創造をめざそうとする生徒たちへの提言のようにも聞える。

以上のような漱石の発言は、百五十人ばかり集まったという聴講者たちの胸にどのような響いただらうか。因みに当時の生徒のなかには前出の人々の外に中村岳陵、戸部隆吉、川崎小虎、小村雪岱、野生司香雪、萬鉄五郎、齊藤素巖、片多徳郎、平井為成、池部鈞、加藤静児、田中良、九里四郎、山脇信徳、長谷川昇、田辺至、藤田嗣

治、金山平三、北村西望、関野聖雲、入谷昇、藤川勇造、千熊宇平、富本憲吉、古田達賢、北原千祿、海野清等々がいた。

第二回目の講演会は翌四十一年六月六日に開かれ、島村抱月(三十四年に次いで二度目)と佐々醒雪の講演があった。それ以後は戸川秋骨、大町桂月(同年十月)、前田慧雲、鈴木鼓村(同年十一月)、前田黙鳳、岩野泡鳴(四十二年四月)、遠藤隆吉、生田長江、小山内薫(四十三年五月)、寺崎広業(同年九月)、後藤宙外、馬場孤蝶、松居松葉(四十四年十月)と続き、その後暫く途絶えて大正三年二月に復活した。このときは超満員の盛況であつたというが、講演者については高村豊周は、梅原龍三郎、有島生馬、与謝野鉄幹、松岡曙村らであり、梅原のもとへは豊周と広川松五郎が頼みに行つて了解を得たにも拘らず梅原は風邪で欠席してしまつたと言つており『自画像』昭和四十三年。中央公論美術出版)、一方、広川松五郎は、講演者は与謝野、有島、梅原の三人で、自分が梅原のもとへ頼みに行き、大講堂のステージに引張つて來たと言つている(323頁「追憶の自画像(断片)」)。さらに月報には当日の水谷鉄也の講演録が載つていたといった具合で、誰がどのような講演をしたのかははっきりしない。翌四年十一月には小林万吾、坂井犀水、中川忠順、三宅雪嶺らの、また、同年十月には黒木欽堂、滑川澹如らの講演会があつた。

以上が文学部の活動の概況であるが、こうした活動が高まつた背景について考えるとき、第一の要因として掲げられるのは文学界からの影響ということである。日露戦争以後、特に自然主義文学の盛況とそれに対する種々の反発というかたちをとつて創作、評論活動が活発化し、やがて近代文学確立の時期が到來するが、そのような

新しい息吹は同じく創造をめざす若い美校生たちの関心を引いたに違いない。また、一般に明治三十年代から四十年代にかけて美術界と文学界の交流は次第に密接になりつつあった。与謝野鉄幹を主幹とする浪漫派詩人、歌人の集団である東京新詩社の機関誌『明星』が発刊されたのは明治三十三年四月であるが、一世を風靡したこの文学雑誌は美術雑誌の性格も兼ねたもので、鉄幹と上田敏による白馬会展覧会評をはじめ西欧絵画に関する論説等も頻繁に掲載され、藤島武二、長原孝太郎、石井柏亭、黒田清輝、岡田三郎助、青木繁、中沢弘光、三宅克己、結城素明らは挿絵やカットを描いて同誌に精彩を添えた。四十年代には文学界の活況に応じて画家たちはなお一層雑誌や単行本の挿絵、口絵等に腕を振うとともに、『白樺』にみられるように文学と美術の交流の密度はさらに増した。こうしたことが文学部盛況の背景にあったのであるが、しかし、それだけではなく、大谷浩、高村光太郎、川路柳虹などといった文才に富む生徒や卒業生たちのより直接的影響があったことも見落とせないだろう。

大谷浩は津山中学校在学中から友人と文学雑誌を出し、『文庫』に寄稿していた。本校西洋画科入学後も文筆活動を続け、明治四十三年に卒業した後は『中外商業新報』の記者となって展覧会批評と芝居スケッチに腕を振るい、名を知られた。田辺孝次は校友会文学部の特に講演部、俳句部の創始発展は大谷の力に依る所が多いと言っている（『新聞と美術記者』十七、『美術新報』第十二巻第八号。大正二年六月）。

高村光太郎が本校に在学したのは文学部再興前で、明治三十年に

予備の課程に入り、翌三十一年に彫刻科の木彫科一年生となり、三年生のときに前述のように新詩社に入った。鷗村の名で俳句も作ったという。三十五年に卒業して研究科に残り、三十八年に西洋画科に移った。翌三十九年三月、教授岩村透のすすめで渡米。ニューヨーク、ロンドン、パリで勉強し、イタリア旅行もして四十二年六月に帰国。若い文学者や美術家の集まりである「パンの会」に加わるとともに、『スバル』（同年一月創刊）にマチスの画論を紹介し、その後短歌、評論、翻訳、詩などを次々と発表したが、そのめざましい文筆活動とデカダンの生活ぶりとは若い層に強い刺激を与えた。特に彼が四十三年四月の『スバル』に寄せた「緑色の太陽」は芸術の表現の自由を求める青年画家たちの心を揺さぶり、印象派、後期印象派、フォーヴィズム、キュビズム等々の西洋における新傾向絵画に倣って個性、自我を中心に据えた表現を試みようとする動きに拍車をかけたことはよく知られているが、校友会月報の同年六月号にはその全文が転載されており、次の七月号には月報編集員の川路柳虹が「PRK」（後述）の署名でそれに対する絶賛に近い感想文を寄せ、さらに十一月号には広島見甫が「尺牘（伊藤順三君へ）」と題して「緑色の太陽」の影響露わな一文を投稿している。柳虹、見甫、順三らは日本画科に在籍していたが、彼らがいち早く後期印象派の研究に着手し、アブサント同人展覧会を開き、見事に新しい卒業制作を描いたことを考えると、「緑色の太陽」の影響がいかに大きかったかがわかる。なお、四十二年には光太郎の弟でやはり文才に富む高村豊周が本校の鑄造科に入学している。その著『自画像』（前出）によれば、彼は光太郎と同期生で父光雲の通い弟子となって

いた今戸精司（号蝸牛。学生時代から短歌を詠み、武者小路実篤、与謝野鉄幹らと交流があった。光太郎と『白樺』を結びつける仲介の役目も果たした。のちに大阪で彫刻家として活躍。）の影響で歌を詠み出し、また、光雲が持ち帰る校友会月報のなかの歌などにも刺激され、兄の光太郎に内緒で明治四十一年に新詩社に入ったという。本校に入学するや、彼はうたがひびと、XXX BOHEMIAN、三郎、じまなどの筆名で短歌、演劇評、美術評論などを盛んに校友会月報に寄せた。彼と広川松五郎は柳虹らの次の時代の文学部をリードしたが、特に豊周の存在は光太郎をはじめとする若い文筆家たちと本校生を結ぶ強力な媒介をなしたように思われる。

川路柳虹は光太郎より七歳も年下で、本校に入学したのも光太郎より十一年あとであったが、文壇に名が出たのは彼の方が早かった。彼は警視総監川路聖謨の孫にあたる。自著『画壇今昔記』（『現代美術』第一巻第一号〜第五号。昭和九年四月〜八月）によれば、彼は工部美術学校出身の母川路花子、叔父川路新吉郎の影響で明治三十七年に京都市美術工芸学校に入り、日本画を学んだ。同級生に田中喜作（豊蔵の弟）が居り、田中は『明星』に夢虹という筆名で歌を寄稿していた、その家にはロセッティやテニソンの詩集、ラスキンやベーターの美術書などもあった。柳虹はそこを訪れてプレラファエライトのことや文学のことを話し合ったり『新声』と一緒に読んだりしているうちに短歌や新体詩に興味を持つようになった。『文庫』や『新声』に投書したこともあったという。明治四十一年三月、上京して本校西洋画科を受験し、日本画科に編入された。彼が「所謂口語詩のエポックをつくったものとして、詩史的に極めて重要」

（本間久雄『統明治文学史』下巻。昭和三十九年。東京堂）とされる「塵溜^{はき}」を『詩人』に発表したのは本校入学の前の年である。『詩人』は坪内逍遙、森鷗外、島村抱月らが蒲原有明、岩野泡鳴、馬場孤蝶らの賛助を得て明治四十年五月から約一年間発行した雑誌で、同誌に載った柳虹の上記の詩や『主観のリズム』がそのまま流露してゐる點で柳虹口語詩の白眉（前掲書）とされる「寢音」（四十一年五月）は詩壇に大きな影響を与え、口語詩流行の端緒となった。四十三年には柳虹は処女詩集『路傍の花』を、本校卒業の翌年（大正三年）には『かなたの空』をと次々に詩集を出し、また、評論やフランス詩壇の紹介などにも筆をふるい、遂に文壇の人となってしまうのであるが、本校在学中の頃は周辺の生徒の文学趣味を大いに煽りたてたようだ。校友会月報第九卷第二号に『路傍の花』に寄せて作った広川松五郎の短歌や広島晃甫の文が載っているのはその証の一つである。柳虹は明治四十三年三月から大野隆徳とともに月報編集員となった。当時の月報を見ると、大野が実名でよく執筆しているのに対して柳虹の執筆であることが明白なのは第九卷第六号（四十四年四月）の「日記から」のみだが、筆名ないし無記名で大いに執筆したと思われる。「PRK」という筆名は第八卷第八号（四十三年六月）「談論紹介」欄の岩村透の論説抜粹、次号の詩「サロメ」および「漫語」と題する「緑色の太陽」への感想、第九卷第三号（同年十二月）のアプサント同人の会に関する記事等に用いられているが、これなどは柳虹の筆名であろう。「PRK」は「P・R・B」（Pre-Raphaelite Brotherhood）をもじったもので、「Poet Ryukō Kawaji」の略号と考えられる。四十三年には文学部のなかにアプサント小集（506頁参

照)という出入り自由な座談会ができ、柳虹は広島見甫らとともにその牛耳をとった。

以上の外に文筆に秀でた生徒は多々あったが、そのなかの一人をあげるとすれば田辺孝次である。彼は柳虹と同期の彫刻科生徒で、岩村透に文才を買われて『美術新報』記者、『美術週報』編集主任となった。校友会月報にも実名ないし「た・か生」の筆名で散文、詩、戯曲、展覧会評などを頻りに寄稿している。彼もまた文学部の立役者の一人であったと考えられる。

文学部は高村豊周が卒業した頃からさびれ、一時期詩文会(大正六年大村西崖の懇通により日本画科生徒が中心になって創設した漢詩・漢文の研究会)の活動があったものの、昔日の悌は失われた。大正九年に至って文芸部と改称され、再度復活が図られる。

⑨ 東京勸業博覧会

明治四十年三月二十日から同年七月三十一日にかけて上野公園内に設けられた三つの会場で東京府主催の勸業博覧会が開催された。出品部門は十九部に分かれ、第一部が教育・学芸、第二部が美術(絵画、彫刻、美術工芸)、第三部が図案画であった。本校では正木直彦校長が美術および美術工芸部の審査部長に任命されたのをはじめとして多くの教官が審査員となり、学校としては第一部へ成績品を出品し、教官、卒業生、生徒らは個々に第二部へ出品した。また、学校の依頼製作事業の一環として会場装飾用彫刻の製作にあたり、積極的に協力した(364、369頁記事参照)。

美術の部門は、東京府主催の博覧会であったために東京在住者の

出品が大半を占め、また、五浦移転後日の浅い日本美術院の面々は出品せず、彫刻の部門で北村四海が擬賞に対する不満から自作の大石像「霞」を破壊するというセンセーショナルな事件が起こった。しかし、出品は盛況で、川合玉堂の「二日月」(一等賞一席)をはじめ、岡田三郎助の「某婦人の肖像」、和田英作の「斜陽」、中村不折の「建国勲業」等々の話題作が注目を集めた。青木繁の「わだつみのいろこの宮」が出品されたのもこのときであったが、これは三等賞末席に終わった。

本校関係者の出品を見ると、日本画では教授荒木寛畝が得意の花鳥画「孔雀」を出品し、同寺崎広業は「王摩詰」、同川端玉章は「富士」、助教教授結城素明は「蝦蟇仙人」を出品。卒業生では本多天城(佑輔。二十六年卒)、渡辺香涯(啓三。三十年卒)、渡辺萊渚(吉太郎。三十四年卒)、前波鶴年(寛次郎。同)、平田松堂(栄二。三十九年卒)、平木清光(弥一郎。同)、水上泰生(同。研究科)等が、また、在校生では桐谷洗鱗(長之助。卒業期生)、武藤直信(四年生)等が出品している。西洋画では教授岡田三郎助、同和田英作が前記の作を、助教教授小林万吾は「静」、同長原孝太郎は「停車場の夜」を出品。卒業生では山本森之助(三十二年卒)、中沢弘光(三十三年卒)、椎塚修房(同)、萩生田文太郎(同)、青木繁(三十七年卒)、橋本邦助(三十六年卒。研究科)、児島虎次郎(三十七年卒。研究科)等が、在校生では渡辺省三(卒業期生)、青山熊次(四年生)、紺野三郎(三年生)、九里四郎(同)らの出品があった。彫刻では教授高村光雲の「木彫像郭子儀」、同石川光明の「木彫群羊扁額」、同白井雨山の「乾漆像力士扛鼎」、同竹内久一「木彫観世音立像」、助教教授黒岩淡哉「石膏像嫦娥」、同水谷佳園